

博物館教育の社会史的一考察—ドイツを例として—

Kleine Sozialgeschichte der Museumspädagogik — das Beispiel aus Deutschland —

種 田 明*
Akira OITA

Zusammenfassung

Der vorliegende Aufsatz möchte mit einer Geschichte vertraut machen, die bisher ein Außenseiterdasein am Rande der japanischen institutionalisierten Museumskunde geführt hat. Hier gibt der Verfasser ein Beispiel aus Deutschland, in dem Museumspädagogen mehr oder weniger durch die Zusammenarbeit von Museum und Geschichtsunterricht versuchten (s. Tafel 1.) und versuchen müssen (vgl. Literatur), vielfältigen Schwierigkeiten zu begegnen.

Heute kann ein Museum sicherlich viele Möglichkeiten und Funktionen anbieten und vorbringen, aber nicht alle, vor allem weil es jenseits der Museen das aus einem Gegenwartsbewußtsein hervorzugehende Geschichtsbewußtsein des Publikums gibt. Nicht nur um ein Museum als Lernraum aufzumachen sondern auch um das im Museum gesammelte Wissen (inkl. Geschichte der Museumspädagogik) zu vermitteln, wird eine Museumsdidaktik gesucht.

Anlässlich des 100jährigen Jubiläums des Zoologischen Gartens Ueno und des 100. Todestags von Charles Darwin (1809-1882) macht der Verfasser einen Vorschlag, darüber nachzudenken, wie ein Museum sich entwickelt oder welche Wechselwirkungen zwischen Museum und Gesellschaft bestehen.

小論の目的はこれまで日本の既成の博物館学の境界に在った(博物館教育の)歴史を紹介したいというものである。ここでは博物館と歴史(郷土誌)授業との協働により、多少とも様々な困難を克服することを試みてきた(図表1参照),そして試みなければならぬ(注記・文献を参照せよ)ドイツの博物館人・教育関係者(の足跡)を例に挙げた。

今日、博物館は多様な可能性と機能を有している。しかし博物館は全てを提供することはできない。なぜなら、博物館の外には各層入館者の現実認識から出て来る多様な歴史意識が在るからである。博物館を教室にするためばかりでなく、(博物館教育史を含む)博物館に集積された知識を活用するためにも、博物館教授学/法(の確立)が求められているのである。

上野動物園開園100年、(多くの学問、近年では生命科学にまで影響を与えた)ダーウィン没後100年を機会に、博物館はどのように発展するか(あるいはしてきたか)、また博物館と社会との相互関係は如何なるものなのか、について広汎に再検討すべきであると提起するものである。

*おいた あきら

玉川大学文学部理財専攻

Dozent an der Tamagawa Univ., Tokyo
VDI u. Mitgl. d. Deutschen Museum München
(privat) 5-1-33-108 Tsurumaki, Setagaya-ku,
154 Tokyo, Japan.

原稿受理: 1982年3月15日

連絡先 (自宅)

▽154 東京都世田谷区弦巻5-1-33-108

(電話) 03-420-6957

I

ドイツ博物館同盟(Der Deutsche Museumsbund, Frankfurt a.M.)に属する博物館約1500館のなかで、直接の過去である戦争を跡づけたものはおそらく「ダッハウ強制収容所記念館」のみであろう。

KZ (Konzentrationslager)-Gedenkstätte Dachau

<メモ> 面積2500㎡, 図書館(室)約5000冊, 資料約13000点, 設立1965年—旧強制収容所管理事務所建屋に、ダッハウやその他の強制収容所の歴史およびナチスによる迫害の記録と史料を所蔵。

旧収容バラック2棟がそのまま保存され、悪名高い火葬場と墓標は他から移築して保存されている。

所有管理者—バイエルン州政府, ダッハウ国際委員会(Comité International de Dachau, Brüssel)〔1〕

近代における科学技術と社会の問題を考える基本は生命と生活の尊重である。過去の暗い戦争, 現在のブームともいえる文化財や環境の保全, 未来へ向けての宇宙探査, 生物工学などはすべて人間のなせる業であり, ある意味ではそれら人為的所産の結節点として博物館はあるべきであると筆者は考えている。〔2〕

もし人間を肉体的に切り刻むのが戦争であるとすれば, 今日的人文・社会・自然諸科学が細分化され専門化してゆく現況は人間を精神的に切り刻むことではなからうか。アメリカ映画“Holocaust”を見たドイツ語圏, なかでも旧当事国, 現ドイツ連邦共和国では, 約2000万人が一西ドイツ総人口約6100万人—注視し, 3万通を越す電話がテレビ局に寄せられたという。〔3〕ベトナム戦争という苦衷を体験したアメリカ人によるドイツ人に対する世界史観・戦争に対する考え方が, 人類愛をテーマとした多数の映画のなかでこの映画を興業的にも成功させたのであった。

小論で筆者が意図するものは, 日本における既成の博物館学の境界領域からの問題提起である。ドイツの博物館をみた限りで言えば〔4〕, 博物館の有する機能は資料の収集保存・展示と調査研究・教育のみでなく, (全てではないが)多くの可能性を秘めた“人間性研磨創造の現場”である。折しも上野動物園は開園100年を迎え, 国立歴史民俗博物館もやがて開館すると聞く。大阪には産業技術博物館が構想され, “85年つくば万博”跡地には技術記念館が計画されているというこの機会に, 博物館教育の問題を歴史・理論・実践のさまざまな視点から再検討すべきであると思う。

II

博物館の最初の定義は筆者の知る限り1727年C.F. ナイケリウス(ドイツ人)によるものである:〔5〕

「博物館とは本来的に次のような場所を意味する。すなわち私たちドイツ人が書斎と称する所であり, 書斎には博物標本室とか珍しい物が沢山詰った整理棚, さらに小さな図書室が付随しているのである」。

書斎(Studier-Stube)すなわち調査研究室のなかに, マニエリスム的な或いはギリシャ・ローマ以来の個人的なコレクション(標本)を備え, 文献史料を納めた書庫をもち, 同好の志が集まり談論する“サロン”こそ, 18世紀のドイツ人が思い描く博物館であった。〔6〕

文芸復興と人文主義のルネッサンス期以降の絶対主義の時代は, 教育, ことに初等普通教育と高等教育において注目すべき時代である。例えばアメリカやプロイセン等ドイツ諸領邦における大学の新設, フランスやスコットランドにおける初等及び職業教育施設の拡充, 日本の寺小屋やスイスのペスタロッチ(Johann Heinrich Pestalozzi 1746-1827)の出現などである。博物館をこのような社会と教育との相互関係の流れの中で, 教育的機能をもつ研究施設として捉えなおそうという考え方は, 18世紀以来今日まで幾度となく登場して来ている。学問の形成過程で, 技術産業(職業)訓練と結ぶ労働運動の中で, 市民大学や教養講座を推進する途上に, そして近年には19世紀末に脚光を浴びた“野外博物館”を余暇利用・文化財移築保存・環境保護に関連させる市民運動のなかに看取できるのである。

「ゼンケンベルク博物館」に始まると思われるドイツの博物館教育は, 文豪ゲーテ(Johann Wolfgang von Goethe 1749-1832)の力が与って設立したこの自然誌博物館の当初からの構想であった。1817年開館以降55年間にこの博物館を訪れ, 或いは研究に参加した学者達のごく一部を列挙しただけでも19世紀自然科学史上に占めるこの博物館の意義の一端が知られよう——Lorenz Oken, Carl Gustav Carus, A.v.Humboldt, Carl Ernst v. Baer, Theodor Schwann, Rudolf Virchow, August Weismann, Charles Darwin, etc.〔7〕, 以下に示す図表は, 筆者が現在までに知り得た博物館教育と社会とが交錯する上で欠くことができないと思われる出来事を, 系譜化したものである。〔8〕これまで, どちらかといえば“展示”を中心として優れた博物館(的=デパート等含む)活動をしてきた日本と比較して参考にならう。

図表(Tafel)1:博物館教育(学)史抄

<Stand Aug. 1981 A.Oita>

(ドイツ/ドイツ連邦共和国)

[年]	[教育との関連]	[政治・経済・社会]
1826	◇自然史をテーマとする理科授業 (ゼンケンベルク博物館)	1848 ドイツ3月革命
1860	◇最初の「学校博物館 Schulumuseum」 の考え提示(E.A.Rossmäler)	1852 ゲルマン民族博物館設立
1903	◇講演/論文「国民教育の場としての 博物館 Museen als Volksbildungsstätten」 (A.Lichtwark)	1871 ドイツ帝国成立
1909	◇郷土博物館に郷土庭園を付設する試み (H.Eidmann)	1903 ドイツ博物館設立 (O.v.Miller/25開館)
1909/13	最初の野外博物館の設立開館 (Königsberg市:現在Kaliningradソ連 領)	1910 皇帝ウィルヘルム協会設立 (現在のマックス・プランク協会の前身)
1920's	◇ベルリン諸博物館において「教師・学 芸員養成コース」の試み(W.v.Bode, W.Waetzold u.a.)	1914-1919 第1次世界大戦
1928	◇ヘッセンのギムナジウムにおける歴史・ 郷土誌授業に「博物館所蔵資料を使用」 する試み(ローマ・ゲルマン中央博物 館, Mainz市/H.Klenk)	1918? ドイツ博物館同盟結成
1934	◇最初の用語使用例「博物館教育(学) Museumspädagogik」 (K.H.Jacob-Friesen)	1919-1932 ワイマル共和国時代
1941	◇最初の実際的方法論的報告 「学校と博物館 Schule und Museum」 (A.Reichwein)	1928 「芸術と美術」展 (博物館 Folklohmuseum, Essen市)
1963	◇全州文部大臣会議議決=公教育の推進	1933-1945 ナチスによる「血と国家イデオロギー "Blut-und Boden"-Ideologie」
1968	◇全州文部大臣会議議決=博物館の教育 的役割を推奨	1939-1945 第2次世界大戦
1969	◇KpZ(美術教育センター)設立 (ゲルマン民族博物館, Nürnberg市)	1949 東西ドイツ独立
1971	◇ドイツ博物館同盟内に「学校と博物館」 委員会設立	1950's 復興再建
	◇UNESCO国際ゼミナール「博物館 (内)教授学 Museumsdidaktik」	(1957 ドイツ博物館同盟(再興))
1975	◇ドイツ博物館同盟 年会テーマ:「教育の現場としての 博物館 Museen als Bildungsstätten」	1960's 高度成長
1976	◇ケルシェンシュタイナー・コレーク (Kerschensteiner-kolleg)設立(教員 ・学芸員再教育施設/ドイツ博物館内)	1970's 大学改革 価値観の多様化
		1977 「シエタウファー時代」展 (州立博物館, Stuttgart市)
		1980/81 「大プロイセン」展 (Berlin市ほか)
		1982 "ゲーテ没後150年記念"展 (詳細不明)

Ⅲ

ドイツの博物館の特徴は、かつての領邦君主制、現在の連邦構造を顕在的に反映させたものが多いということである。国を代表する中央集権の存在が無く、地域・地方に分散して大部分が州及び地方自治体や公益財団により所有管理されているのである。従って教員・学芸員養成コースは相似ているとはいえ、州によっては他州でのコース履修や実習を認めないところもある。〔9〕入館者や学習者にとって、このような競争的ともいえる博物館の充実が望ましい楽しみなことである。がしかし博物館の専門家や教員・学芸員にとってそれは「作業の連続性と研究の独立性を保障するもの」の「共同で解明し、克服しなければならない問題も、例えば修復、博物館保安、中央的なドキュメンテーション、研究調整、方法的基盤の作成等多数」を抱え続けることを意味している。〔10〕

これらの問題点を博物館教育に移し替えてみると、求められているのは教員・学芸員それぞれの個人における博物館教授(学/法 Museumsdidaktik)の確立ということに集約されよう。それは博物館教育、すなわち博物館と教育という分立しうる領域を、人間によって関係づけ総体総合化するための必要十分条件の一つである。1960年代後半から現在に至る大学改革(教育制度の再検討)と博物館ブーム(特に自然科学と産業技術の達成、公害や自然環境の破壊、反原発・核軍縮を求める市民運動 etc.からの科学技術博物館への関心の高まり)は、市民社会を内側と外側の両方から変革しつつあるのである。

ダーウィン(前出、1809-1882)の学説は学問の他の分野で社会進化論を生み出した。しかるに彼の没後100年たってもなお、頑なに自然選択説を拒否する多数の人人がいる。人間の歴史意識は現実認識から出て来るものであるが、分裂国家ドイツの人々は総合統一すべき多くの問題を含む“博物館”をどのように認識しているのだろうか。文化的多様性・多中心性という表現で示されるように最も数の多い地方の郷土博物館(Heimatemuseum)と、歴史教育(郷土誌授業 Heimatkunde)と、の協働による多種多様な試行錯誤の分析が筆者の今後の課題として残っている。博物館はどのように発展するかあるいはしてきたか、また博物館と社会との相互関係は如何なるものなのか、を考察することが博物館教育の研究の大前提だからである。〔11〕〔12〕

(1982.3.6 稿了)

注記・文献

- 〔1〕 Mörmann, Klemens(hrsg.): Der Deutsche Museumsführer in Farbe, Frankfurt a.M. (Krüger) 1979, S.177 より。
- 〔2〕 伊東俊太郎「科学と現実」1981(中央公論社)、内田義彦「社会認識の歩み」1971(岩波書店)、などを参照。
- 〔3〕 "Der Spiegel" Nr. 5, 33 Jg. 29. 1. 1979, S. 18
- 〔4〕 拙稿「文化遺産と博物館」(大西健夫編『現代のドイツ』第10巻「文化と伝統」, 1982(三修社)所収)を参照されたい。
- 〔5〕 拙稿「博物館教育論—西ドイツの最近の動向」(『科学史研究』Ⅱ 18, No 131, 1979, 183-188 ページ)。
- 〔6〕 藤野幸雄「大英博物館」1975(岩波書店)を参照。
- 〔7〕 F.A.Z. (フランクフルター・アルゲマイネ新聞) 19. 1. 1979 文芸欄
- 〔8〕 拙稿「博物館と社会教育」(『産業考古学』会報 No 18 (1981), 21-26 ページ)および文献〔5〕の注記・備考に参考文献を示してある。(最近のものは Dr. Konrad Vanja (Staatliche Museen Preußischer Kulturbesitz, Museum f. Deutsche Volkskunde:プロイセン文化財団ドイツ民俗博物館)より教示されたもの数冊あるが筆者未看。)
- 〔9〕 文献〔8〕, p24 図表 3 "博物館教育者養成へのドイツ博物館同盟試案"を参照されたい。大学と教員養成について詳しいのは、大西健夫編『現代のドイツ』第6巻「大学と研究」1981(三修社)。
- 〔10〕 カール・ローマー編「ドイツの実情」1979/80 (レキシコテーク出版, Lexikon-Institut Bertelsmann), 日本語版—引用は 308-309 ページより。
- 〔11〕 Buddensieg, Tilmann u. Rogge, Henning(hrsg.) Die Nutzlichen Künste, Berlin (Quadrige) 1981, Einleitung S. 10-11 を参照。
- 〔12〕 注記・文献〔10〕との関連で、“ドイツ”を称する専門博物館を以下に示す。

図表 2 専門博物館抜粋(都市名 A B C 順)

所在都市/町村	館名
Altena	ドイツ針金博物館
Arnsberg	ドイツ鳥かご博物館
Bad Mergentheim	ドイツ騎士団博物館
Bad Oeynhausen	ドイツ童話・ヴェーザー川民話博物館

Bayreuth	ドイツ・フリーメイソン博物館	München	ドイツ狩猟博物館
Berchtesgaden	ドイツ紋章博物館		ドイツ博物館(自然科学と技術の傑作品の)
Berlin	ドイツ放送博物館		ドイツ醸造博物館
	ドイツ気化器博物館	Neckarsulm	ドイツ二輪車博物館
	ドイツ民族博物館	(Nürnberg	ゲルマン民族博物館 Germ. Nationalm.)
Bochum	ドイツ鉱山博物館		
Bremerhafen	ドイツ 船航海博物館	Offenbach a.M.	ドイツ皮革博物館ドイツ靴博物館
Bunde	ドイツ・タバコ博物館	Remscheid	ドイツ・レントゲン博物館
Dusseldorf	ヘティエンス博物館/ドイツ陶器博物館		ドイツ工作機械(の道具の)博物館郷土博物館
Erbach	ドイツ象牙博物館エルバッハ	Sehnde	ドイツ市街電車博物館ハノーバー
(Frankfurt a.M.	連邦郵便博物館 Bundespostm.)	Solingen	ドイツ刃物博物館ゾーリンゲン
Fulda	ドイツ消防博物館	Stuttgart	(ドイツ聖書財団)聖書博物館
Hanau	ドイツ金細工博物館		ドイツ農業博物館
Heidelberg	ドイツ薬局博物館	Ulm	ドイツ・パン博物館協会
Hersbruck	ドイツ羊飼博物館	Velbert	ドイツ錠止金博物館
Ingolstadt	ドイツ医学史博物館インゴールシュタット	Verden(Aller)	ドイツ馬博物館協会一天馬研究所(—Hippologisches Institut—)
Karlsruhe	第1ドイツ・ユグノー教徒博物館	Wangen im Allgäu	ドイツ・アイヒェンドルフ・博物館(Eichendorff, Joseph, Freiherr von 1788-1857 後期ロマン派詩人)
Kassel	ドイツ壁紙博物館		
Kitzingen	ドイツ・カーニバル博物館		
Kulmbach	ドイツ錫人形博物館		
Langenburg	ドイツ自動車博物館ランゲンブルグ城		
Leinfelden-Echterdingen	ドイツ・カード(カルタ)博物館協会		
(Marbach a.N.	<バーデン・ヴュルテンブルク州>シラー国民博物館 Schiller-Nationalm.)		
Michelau i.Ofr.	ドイツ編かご博物館		

[文献〔1〕,〔8〕: Uta Bauer(Red.), Stille Museen, Spezialsammlungen, Fachmuseen und Gedenkstätten in Deutschland, München(Keyser)1976
その他より。]